

新・平家物語

第三卷

新・平家物語 第三卷 (全十二卷)

定 価 三 五 〇 円

昭和三七年二月二〇日 第一刷発行
昭和三八年一月二〇日 第二刷発行

著 者 吉川英治

発行者 伴 俊彦

印刷所 大日本印刷株式会社

発行所 東京 小倉 大阪 名古屋 朝日新聞社

© 吉川英治 一九六二年

第三卷目次

常磐木の巻(続)

三

石船の巻

九三

みちのくの巻

二六三

装幀 NDC 原 弘

常磐木の巻(続)

凡情納経

梅雨もあがつて、初蟬を聞くと、雲のたたずまいも、空の色も、はつきり、夏にはいつていた。

『どうだな、この辺の出水は。……大したこともなかったかね』

朱鼻が、やって来ると、かれはいつも門を通った前栽のあたりから、そこらに見かける召使たちへ、こう大声でいちらすのが常であった。

蓬子は、泉殿の流れのすそで、洗濯物をしている下婢たちに交つて、いくつもの雨傘やら日傘をひろげて干し並べていた。

『おや、蓬子。たいへん見事な唐絵傘があるな。これは、まさか、おまえのではありません』

『ええ、わたくしではありません。常磐さまのお傘です』

『常磐どのの？……。へえ、どうして、常磐どのが、

こんな洒落た唐絵傘をお持ちだろう。この小館から一歩もお出にならないお人が』

『たつた今、西の京の、大宰ノ市で買って来たんです。ところが、開いてみたら、こんなに襷が咲いているので、今、ほかのと一しよに、干していたところですよ』

『ふうん、大宰ノ市で買ったのか。じゃあ、これをさして、どこぞへ、お出かけになるつもりか』

『百日の結願には、なんとしても、わたくしがお連れ申すつもりです。その結願の日が、あさつてですから』

『どこへお連れ申すんだって』

『どこつて、御存じでしょう。清水の子育観世音を』

この日、朱鼻は、奥へ通つて、常磐とも、話しこんでいた。

一ころ、かれが心配しぬいた源氏の殘党の影も、この築土に、昼夜、警固の兵を立ててから、まったく、怪しげなことは跡を絶ってしまった。朱鼻はそれを、兵の威力によるものと、今でも信じきっている。

で、近ごろはもう、その方の憂いは、忘れ果てていた。

ただ、欲をいえば、清盛はなお、あれぎり車を向けていない。かれが清盛に深く取り入ろうとする手だては空を打っていた。そうした忠勤ぶりがむなしのままに、梅雨のかびに委せてあるうらみはある。

けれど、事実、清盛に通うひまのないことは、眼にも見ていた。いつかは、そのお暇もできよう、お氣も向こう。——今ではかれも氣を長くそれを待つては、ときどき、異変はないかと、見まわりに来るだけのものだった。

しかし、このごろはもう殘党の心配はなくなつたにせよ、常磐が外出するということを、清盛に黙っているいいかどうか。——万一でもあればこれは自分の責任になる。

そう考えたので、かれはその日、

『結願の御参詣は、やむを得ますまい。そういう御気分にお成りになつただけでも、てまえとしては、よろこばしいが、一応、六波羅様のおゆるしのあるまで、

お待ちください。今明のうちに、御内意を伺っておきますゆゑ』

そう常磐に言つて歸つて行つた。

次の日、返辭があつた。

『さしつかえないとの、おゆるしです』と、ある。

常磐は、蓬子ひとりを、連れただけで、その日、清水へまいつた。

百日の間の写経を、子育觀世音の宝前に納めて、『三人の父なし子たちの行く末を、なお、御加護あらせ給え』

と、祈つた。

祈願には、思いがけなく、数十人の僧が侍立し、一山の主なる僧はのこらず並んで読経した。香華やら供進の物、また万灯の灯明など、眼も綫になるばかりであつた。

常磐は、称名の声と、香煙の中にぬかずいて、『三人の子には、母もありません。母は義朝どのとの契りを抱いて、今生は終わっております。——ここに

ある常磐は、形だけの女です。地獄をさまよう女でしかありません。どんな苦患を、この女にはお降しあつても、あわれ、父母のない三人の子には、大慈大悲のおん眼をそそいでくださいませ。武門源氏のなした宿業の報いが、どうか、幼き孤児たちへかかりませんように』

と、念じつづけた。

正月の初め。——まだ冬風がここの床や内陣を、氷室のようにしていたころ、牛若を抱き、今若、乙若をむしろの上に寝せつけて、ただ子たちの生命が保たれることのみを、一心、母の権化となつて、念じていたあのときの自分を思うと、かの女は、涙があふれて、止めどもなかった。

そのときの自分が——母になりきれていた女の生きがい——われながら、慕わしい、いじらしい。

読経がすみ、やがて納経の式も終わると、あとは、常磐ひとり、そこにいた。いつまでも、このまま、ここにいたいように、かの女は、時を忘れていた。

『……常磐さま、常磐さま。あちらの別院で、少々、お休みくださるようにと申されています。もう、御納経もすみましたことゆえ』

と、ひとりの僧が、後ろに来て、告げていた。

かの女は、われに返つたように、

『あなたがとうございます……』と、ふと顧みて『お……あなたは、光厳様ではありませんか』

『光厳です。お久しゅうございました』

『あのときのお情は——』と、常磐は向き直つて、その僧の姿へ、掌を合わせた。『光厳様。いつまでも、忘れはいたしません。わたくしの今の身は、あなたに会うのも、お恥かしい変りようをいたしましたが』

『勿体ない、お掌をおあげください。何をあなたは、そのように、御自身、恥じていらつしやいますか。光厳の眼には、あなたこそ、子育観世音そのものに見えますのに』

また、べつな僧が、小走りに来て、常磐をうながした。

『ご案内いたします。常磐様。どうぞこちらへ』

『いえいえ。道も遠うございますから、このままお暇いたします』

『いや、それは、困ります。早くからお越し遊ばして、あちらで、あなたのご祈願のおすみになるのを、せっかく、お待ちしておられるのですから』

『……どなたが？』

『きょうの施主のおん方です』

常磐は不思議にたえない面持ちである。施主とはだれであろう。きょうの施主は、自分以外の者ではあり得ない。

が、僧たちは、ともあれと、急ぎたてた。

光巖がいる。常磐は、光巖に従いてゆくつもりで、導かれた。長い回廊や橋廊下を渡って、一室へ通った。

『……あ。あなたは』

かの女は、白藤の花が、つと、揺られたように、立ちすくんだ。そして崩れるようにすわった。

『常磐。……そんなに意外なのか』

池水の波紋や、若楓の木洩れ陽が、清盛の横顔を、

常のものより、明るくしていた。

『壬生へ、心をひかれながら、つい暇もなくて、あれ以来、逢えもせぬまに、いつか夏になってしもうた。』

……早いなあ、木木の移りは。そなたは、つつがなく暮らしていたか』

『はい……』

なんという女の感情なのであろうか。常磐は、自分でも理解のつかない懐かしさやら、理由の知れない涙に、胸を、こみあげられていた。

清盛がかの女を見たときさの眼にも、同じような複雑なものがあつた。いつかの朧夜の思い出も、いつばいにたたえていた。そして何か、少年じみた羞恥に身を硬くしたが、すぐいつものかれに解けていた。

『きょうの施主が、おれと思わなかったのは、むりもない。いわば要らざるおせっかいだ。けれど常磐……おれはおれのための、供養をとくにさせていたのだ。清盛の愚かしさ。男のばか。わかるかなあ、女のそなたに』

『何やらお心の少しは……』

『そうだ、少しでいい、少しでも分かってくれたら、ありがたい。——が、なおそのうえにもおれは愚かな考えを極めた。ここでは、申しにくい。あとで、朱鼻からよう聞いてくれい』

明るくいいながらも、かれはふと眼を横に反らした。涙に、青葉の影が映っている。

その日、このの池亭で、わずかな語らいをしたきりで、ふたりは以後、その年の夏中も、いや翌年も翌翌年も、またと会う日もなくなった。

常磐は、他家へ再縁した。もとより清盛の意志によつてである。この年の秋にはいると、かの女は、壬生の小館を引き払って、前の大藏卿藤原長成の家へ、後添えとして、嫁いで行つたのである。

万端は、朱鼻の伴トが、取り運んだ。

あれほど、ひとりの女の貞操に、やきもき、興味半分、とりざたしぬいた京雀も、秋には、うわさも何も忘れていた。

歌 法 師

西行法師はここ数年の間、都のうつり変りも見なかつた。どこにいても、時局のうわさは聞くであろうが、その後、都の土は踏んでいない。

ひところは、吉野に仮の庵をむすび、修行のために、熊野や大峰へ分け入ったり、また伊勢の二見にも、しばらく住んでいたが、春早早、東海道を経て、遠く、宮城野から陸奥へかけての、歌の旅へ立っていた。

奥羽の押領使藤原秀衡の館のある衣川も、尋ねた。

秀衡とは、こんど会つたのが初めてであるが、秀衡の父基衡とは、むかし都で一、二度会つたことがある。その基衡はもう去年世を去つていた。

しかし秀衡も毎年、貢馬のことだの、摂関家への公用をもつて、幾度となく上洛はしているので、たぶん都で西行のうわさも耳にしていたものであろう。西行は、かれの館にひきとめられ、思わぬ知遇をうけたが、

やがて、初秋とともに、秀衡とも別れて、衣川を去つた。

出羽ノ国から、越後の村上を経て、木曾路の秋のさかりに逢い、やがて久しぶりに、かれが都へ近づいたのは、その年、永暦元年の九月であつた。

急ぐ旅ではないが、ちょうど湖南から滋賀へゆく便船があつたので、西行はそれへ乗つた。そしてほかの乗り合い客と一しよに、船が出るのを待つ間に、かれはこの春、天竜川の渡しで別れたままの、西住のことを思い出してゐた。

こんどの旅行中、どうして、弟子の西住と、途中でたもとを分かつてしまったかというに、次のようなことがあつたのである。

……東海道の天竜の岸を、今し一艘の渡し船が、離れようとしてゐた。

すると、諸国、どこにも多い、土地の地侍といったふうな男が、三人ほど、

『おうい待てつ』『船頭、待てつ』と、手を振りながら駆けてきた。

しかし、客はもう一ぱいだし、流れは急なので、船頭が、乗せ渡ると、地侍たちは、もつてのほか腹をたてて、

『おれたちは、ちと、急ぐ体だ。見渡せば、どうでもいい凡下や、乞食坊主なども、乗っているではないか』

と、暴言を吐きちらし、ふなべりに足を踏まえて、まず西行と西住のすがたに、眼をそそいだ。

旅をすれば今は、こういう暴民の多いのに驚かされる時代なのだ。いたるところに、暴言暴力の徒が、顔をきかしている。しかもかれらは、中央における武人の台頭を見て、近ごろ、なお勢いをふるい、国司と良民の中間に介在して、雑草のような繁殖力と生活力を持ち出した。それをまた、抜きも刈りもできない制度の土壌だったのである。

西行には、分かりぬいている人種なので、そしらぬ顔して、水をながめていた。

そのうちに、地侍のひとりが、
『おい、乞食坊主。そこを立て』
と、頭の上でいった。

西行は、なお、水を見ていた。
すると、かれらは、俄然、悪態をあげせかけ「用で
もないやつが」とか、「この穀つぶしが」とか、まる
で虫けらのように人を見くだして、
『降りろ、やい、降りねえか』
と、脅すのだった。

西行が動かないわけは、かれらへ構えているのでは
なく、そばにいた西住の腕くびをかたく握っておさえ
つけているためであった。

今でこそ、自分とともに、破れがさ一つの沙門とな
っているが、なおこの男には、咬みつくと、猛獣に返
る以前の爪が遺っている。法衣の下には、むかし自分
の家に武者奉公していたころの郎党源五兵衛の血がな
くなっているはいない。——それは西行自身にすら完く失
くなっているとはいえないが——未熟な若年中に身に
つけたものは、そう一朝一夕で蟬蛻できるものでない

ことを、この二十年間に西行も身に知りぬいて来たこ
とである。

だからおりおり、西住にもいつてある。
「辱をうけたときは、道心の堅固か否かを、仏陀に試
されていると思え」と。
そしてまた。

「そういう時は、念仏をとなえていると、心がしずも
る。あとで涙が出たら、自然を見つめて、歌を詠もう
とするがよい」
とも話してある。

けれど、話しているときの話はよくわかるが、じつ
さいに、人の中で、いろいろな場合にぶつかると、西
住のこめかみは、ややもすると、太い青すじを現わし
て、郎党源五兵衛の眼光が眼の底から出るのであった。
今も。

かれの持ち前のものが、わなわなと、西行の手にひ
びいてくるので、西行は、「ここぞ。ここが修行ぞ」
と、なおさら自分を静かに示して見せていたのである。
ところが地侍たちの方では、かえってその冷静を面憎

しと見たものか、

『こいつ、耳はないのか』

と、いきなり左右から西行のえりがみをつるし上げた。そして力まかせに、ふなべりから岸へ突き飛ばしたのであった。

西行は、石に頭を打つたとみえ、「うん……」と、低くうめいた。眼のふちをたらたら血しおが流れた。

しかしその間も、うつ伏したまま、西住の名を、何度も呼んだ。

西住は、心ならずも、地侍どもを見のがして、師のそばへ駆け寄っていた。

そのまに、船は、かれらの嘲笑ちやうしやうを乗せて、岸を離れてしまったのである。西住が口惜しがったことはいうまでもない。無念さに身をふるわせて、

『むかしは、院の北面に、佐藤義清ありともいわれたお方が、今日のお姿は、なんたることでしょう。こんなばかげた非道にも、犬のように尾を垂れて、忍ばなければならぬほどなら、出家などはしないが増しです。いったい、出家の目的は、地獄のがれるため

はなかったのですか。浄土の安住を求めるという遁世とんせが、これではまるで、亡者の苦慮くろではありませんか。

もうもう、わたくしは出家がいやになりました。出家の身でさえなかったら、今のような輩やからを、おめおめ大手を振って歩かせてはおきますまいに』
と、果ては、声をあげて、泣き出した。

西行は、面の血を、ぬぐいながらすわり直した。

『西住、おまえは、本気でそんなに怒っているのか』
『これが無念でなくてなんとしましよう』

『ああ、おまえはまだ所詮しよせん、沙門にはいる心のしたくすらできていない。——憶おもえているかの、むかし、安楽寿院あんらくじゅえんの御幸みゆきに供奉ぐぶのおり、おまえを、待賢門院へのお歌使にやったことがある。するとその帰りみち、おまえは、羅生門を守る源氏の郎党と大喧嘩おおげんかをひき起こし、六条の牢ろうへ投げ込まれたであろうが。……それと聞いて、わしは鳥羽から夜中を急ぎ、六条為義の門をたたいて、危くも、おまえの身をもらいうけて帰って来たことがあった。そんなこともあったのう、西住……』
『……はい』

『あのころの、わが家の郎党源五兵衛と、きようの沙門西住と、いったい、どれほど、違つて来たのか。少しでも、成長して来たと思うか』

『おことばですが、たとえ、いつであろうと、良民を脅して世を押し通ろうとする非道な人間を見ては、わたくしの性分としてゆるせません。またわたくしは何よりも人の辱めには耐えられない。性来、天地に恥のないことをほこりとしている人間ですから』

『そういう口応えが出るうちは、とてもおまえはわしの同行ではない。一つ旅はしても、一つ道を歩んでゐる者ではないのだ。西住、おまえとは、ここで別れるぞ』

『えっ、どうしてです』

『おまえは、もうしばらく、おまえの好む道を歩いて来るがいい』

『では、破門だと仰っしゃるのですか』

『何をいう。西行に、門も垣もあろうか。——わしの願いはいつも通り、生命のある限りを、楽しみたい。——その楽しみを尽すには、名聞や争気を捨て、

自然の野にただ歌の道を守つて行こう。仏の宝土にのみ一切のよろこびを求めよう。——それが出家の誓いであつた。——その西行がまた、破門の入門のといふ規矩を持つてよいものか。おまえはまだこの西行の何一つ分かつていてはくれないらしい』

『いえ、愚鈍なわたくしではありますが、わたくしとて、師の御生涯の道を、あとからお慕い申している人間ですから、皆目、師のお心が分からぬ者とは思ひませぬ』

『いやいやそれが半解りというものよ。おまえは、出家遁世といふことを、世の人なみにしか分かつておるまい。世人のそれは、世捨て人をさすが、西行の出家は、現世への執着なのだ。この生命を、どうしたらより充実させて、楽しく、長く、真実への悔いもなく行けるだらうか。そう生きたい、人間と生まれたかには、そう生きてゆきたい——という願ひにほかならないのだよ。……その根底からして、おまえの分かつてゐるものとはだいぶ違う』

『いえ、違います。わたくしとても……』

『ではなぜ、ややもすると、怒りをなして、辱だの無念だのと、泣き吠えるか。出家沙門を、世捨て人の業と思えばこそ、出家が厭わしくなり、法衣が無念な物に思えて、泣かれもするのであらう。そんな堪忍は、似非の堪忍というものじゃ、むしろ、数珠を切つて、有りのままな俗体になつた方がよい』

そういう西行にも、今なお、いい出すと、どこか肯かないふうがある。

西住もやがては、首を垂れて詫び入つたが、西行は、ゆるさなかつた。どうしても、帰れといつて、きかなかつた。

西住は、ついに、ぜひなく、

『では、仰せに従います。けれど師の御坊が、陸奥を巡つて、都へ上られる秋のころに、わたくしも都に出て、お待ち合わせいたしましょう。それまでの間に、きょうのおことばを、噛みしめておきます。いえ、頭のさきの考え方でなく、身をもつて、もつともつと修行を積んでお目にかかります』
と答えて、しおしおと、もとの二見の庵へ、帰つて行

つたのである。

二見には、もうひとりの弟子、頼阿がいる。

——委細を、頼阿に話して、頼阿とふたりで、あれこれ、議論し合つたことだらう。西行には、かれのそんな姿まで、想像された。

西行は、西住と別れた後も、かれのうしろ姿が、おりにふれ思い出された。

——二十年前、家をも妻子をも捨てて出たかれであつたが、西住とは、その妻子よりも長い間を一つに暮らして来た。そして、そこにはやはり師弟の恩愛が生じ、恩愛のためのわずらいが起つた。西住が自分に仕える気もちには、依然今も、むかしのままな主従関係の道義に似たものが根底にある。かれ自身、心にきびしい規矩をもち、かりそめにも、奉公人の真心をゆるがせにしないのだ。それは、人と人との制度の中では尊いものにちがいない。けれど、西行には、無用である。その忠勤は、仏へこそ励むべきものだ。また、それでは、いつまでたつても、自由であるべきはずのかれの生命が、従属的な習性から抜けきれないし、か